

漢語研究上の一問題

——「れんちよく」の場合——

山田俊雄

漢語が日本語の語彙の中で大きな勢力を占めることは、既に説かれて久しい事実である。数量として多きを擁し、外来系の字音を語形の特徴としてゐるこの漢語の群は、常に増殖をつづける一方で、衰退してゆく部分も絶えず見られるもので、新陳代謝ある故に、将来にわたつてなほ活性を有する形式であると考へられる。

したがつて、一つの漢語を組上^{くみあ}にのばせて論談するとき、同じ表語文字の結合として伝承されるものながら、常にその語の今日の姿や内実を、過ぎし日のものと全同と考へることは、しばしば誤つた認識を生むおそれなしとしない。渝^{なほ}らない中心や易^{かは}りやすい側面を、よく見極めること、時

代の動きに伴つての変化とその速さと、その行はれる範囲とについての微細な考察は、どういふ場合でも、甚だ興味多い事象へ観察者を誘ふものである。

ここに取り出した「れんちよく」もしくは「れんちよく」は、雑俳の用字の調査の途次に、偶然に私の視野に入つて来た、些細な語である。わざと仮名書きで示すやうに、恐らく「廉直」「廉直に」に相当する漢語であらうといふ確信に近い推測を抱いてゐるに拘らず、その語の在り方は「レン直」「れんちよく」の如き表記をもつて文献に見える故に、あへて漢字で示さないを可とするかと思はれるも

のである。

『明治冠附集』（明治十四年八月廿二日出版御届。大阪府平民 泉原貞藏撰）は、近世以来の雑俳をうけつぐ明治時代の、撰集の一つである。この小冊子、本文三十丁、序文（明治十あまり四年夏 夢の家主人）識）二丁（二丁ウは「名こそかはれ 諫鼓はときの投書函」の句に、絵がある）のもので、片々たる横本一冊にすぎないが、奥には、裏表紙の見返しとして刊記と共に、「文栄堂蔵版」と題して、広告するところ、

冠附四季花 全巻冊
同 かさし草 全巻冊
同 粧帑 全巻冊
同 新木賊 全式冊
同 巻萬題 近刻

右の書は陰陽軒和合宗近翁が婦女子／にも見やすき様題をいろは分にし／て作られし古今無類の珍書なり

とある。明治になつても、需要があつたと見え、近世後期

の雑俳撰集の既刊のもの、の再板と、近刊とに言及してゐる。類似の名称の少くないゆゑ細心の注意が必要だが「四季花」以下のもの、「かさし草」にせよ「粧帑」（元の板では多く「化粧帑」とするものであらう）にせよ、また「新木賊」二冊といふところにせよ、これらは寛政以来流行したもの、の明治再刊本と推定されるから別とすべく、「陰陽軒和合宗近翁」にかゝるものとしては、『巻萬題』をのみ指すことと解すべきであらう。和合泉原貞藏の編としては別に『明治冠附五百題』（明治十五年十二月一日出版御届。題字「一味眞 明治十六年一月 如菊題」とあり）や『冠吟／絵入 自詠博覧』（著名な点者に十句づつ自詠を撰んでもらつて集めたもの。明治十六年三月刊）などが知られてゐる。本稿筆者は、別稿として、この『明治冠附集』の語索引と、漢字索引とを基礎にした「明治前期の常用漢字——一雑俳集の場合——」を用意してゐるが、本稿には、その調査の間に得られたところを主に述べることにする。

本書『明治冠附集』の二十九丁オの第八句目に

レン直^{チヨク} ふり歩^{フッ}を足^{アジ}へかましたら

といふ句がある。

同じ題でまた、二十九丁ウの第八句に

レン直レンチヨク すはらしとくとちんばでも

さらに、三十丁オの第三句目に

レン直レンチヨク 戸種トヒかけよつた冷めしが

が見えて、同じ「レン直」の題で、都合三句が撰に入つたこととなつてゐる。「すはらしとくと」は「坐らしとくと」の意であらう。

この「レン直」は、普通に辞典類が解説するやうな意味をもつてゐるであらうか。今、試みに、明治前期のものを調べてみると、

廉潔レンケツ 正ジキレンチヨク 上ニ同シ

(明治七年十二月刊「大増補漢語解大全」)

廉直レンチヨク キガマツスゲ

(明治七年八月刻「廣益熟字典」)

廉潔レンケツ タダシキレンチヨク 同直レンチヨク 同上

(明治九年四月「大全漢語字書」)

廉直レンチヨク マツスゲ

(明治三年十二月「廣益漢語伊呂波字引」)

廉直レンチヨク マツスゲ

(明治二五年「漢語塾字典」)

この「廉直レンチヨク」は、近世の節用集の類では、大抵のものに収めてある語で、慶長以前に遡つてもその事情は同じで、『日ボ辞書』にも見える。

明治の漢語字書の解は、「正ジキ」「マツスゲ」「キガマツスゲ」「タダシキ」「マツスゲ」などといふもので、心の持ち方、志操の正しさに関する賞めことばといふ枠で捉へられるところである。近世の節用集では、語釈を注するものは殆どないが、『書言字考』では

廉直レンチヨク 増句 — ハ不貪也潔也

とする。このやうな解は、注を有する辞書における注のひとしく説くところで、要するに、正直、潔白の徳目と内実とは同じであらうと思はれる。

明治の節用集形式のもの一例で『新式節用辞典』（明治二十五年十二月。山田美妙）においても

廉直^{レンチョウ} 正直潔白であること。（れ之部四音。六一三頁）

とするのは、もつとも通俗のものかと考へられる。

しかし、このやうな解を抱いて、先に示したところの「レン直」の題の三句を見ると、十分な納得が行かないのである。正直や潔白をもつて、「ふり歩^{フッ}を足^ツへかましたら」や「すはらしとくとちんばでも」（現代では差しさはりのある「ちんば」は、ここでは論の展開の都合で原文のまま示さざるを得ないから、暫くそのままとすることを許容されんことを望む）は、解くことはできない。もし前引の漢語辞書の類の解をそのまま用ゐるとしたら「マツスグ」位はあてはまるかも知れない。勿論その時の「マツスグ」は、心情や志操についてのマツスグでなくして、空間にある物体や人間の姿勢や状態についての謂でなければならぬ。

「廉直」を、一義的に、正直・潔白と解するのは、漢語辞典の常套と見てよいが、右に指摘し得たところから考へ

ると、少くとも二義、三義を考へるべきかと思はれる。

その点については、現代国語辞典の中に、第一義として、正直、潔白の意をあげる一方、第二義として、安価、廉価を示すものがある。これは、明治前期ではヘボンの『改正増補和英語林集成』（この版以後を完成した著作とする）の夙く登録したところで、その後、あまりその影響がひろくなくいま、中国側での、いはゆる漢籍の例にもとづいて、第一、第二の二つの意味を分けることが行はれた。たとへば、昭和十二年の『大辞典』などがよい例であらう。

もしこの「廉直」に、安価・廉価の意をみとめるとしたら、それは「レンチ」であるべきかとも考へられるが、国語辞書では、その辺に対する顧慮は見られない。

このやうに、「廉直」を二義とするものの、既に明治期にあつたことを確かめつつも、その内容に到つては、なほ、冠附の三句の題の場合には、十分にふさはしくないといはざるを得ない。

しかし、ヘボンの明治十九年版およびそれ以後のものに見られるやうにその解として

honest, upright, exact, precise, accurate ; cheap.

とある。英語の解を見ると、cheapを第二義として別にす

ると、五種の別語をもつて説いてゐる。その五種の別語を、同じくへボンの英和の部に訊ねてみると

Honest, a. Shōjiki na, tadashii, seichoku na.

Shinjitsu na, mameyaka na.

Upright, a. Jitsumei na, shōjiki, tadashii.

tate, massugu na.

Exact, n. Kichōmen na, shimattaru, genjū na.

kimari no.

Precise, a. Katai, shikakubaru.

katakurushii, kirikojō na.

shikatsuberashii.

Accurate, a. Soi naki, tadashii, seimitsu na.

memmitsu na.

といふ対照がみえてゐる。このへボンの「廉直」の解は、安備・廉価の場合もふくめてレンチヨクといふ語形を承認するものであるが、第一義として必ずしも、漢語辞書のやうな、単純なる言ひ換へでは十分でない、ひろがり、をふくむことを考へさせるものである。即ち upright や exact また precise など、をふくむと見るべきものとしたへボンの解は、この際極めて注目に値する記事ではないか。

ここに又、も一つの用例がある。『繪本冠附梅廼花笠』(綿屋文庫に弘化二年版の第三編ある由。ここには刊行年不明の、後の板。その初編による)に

れんちよくに 馬士のすわつた三が日

といふ句が、その三丁オに見え、手拭を肩にした男が一人、正月の祝ひ膳に向つて正坐してゐる絵が示してある。

「れんちよくに」「すわつた」といふ文脈で解くべきかと思はれる。

この句ばかりではなく、従来知られてゐた用例で

埒が明き 棕櫚箒簾直に直し

(天保十四年九月刊行『冠吟言葉の種』古 戯坊片笛選) 四十四ウ

も、文字は「簾直に」で不精確であるが、やはり、「きちんと正しく」「逆ではなくまつすぐに」といふ通常の姿勢や視覚的な安定をさす副詞として使はれてゐる、つまり、長話か、延引した談判に埒が明いて、箒をもとに戻したのであらう。

また『新とくさ後篇』（外題では『後篇新とくさ全』。寛政十二年初春刊。雄田一樹撰）に、目次百九四に「れんちよく」を出すが、この題で、一〇〇丁ウから一〇一丁オにかけて

（れんちよくに）

武士の捨らぬ拂ひ際
留守居が請た七合入

眼ですぬてゐる數にらみ
鼻と酒呑ム牽頭持

の四句の場合、「武士の捨らぬ」の句はいはゆる第一義で適ふであらうが、第三、第四の句は、物理的、生理的な姿勢や状態に關しての用語であらう。

川柳評の『万句合』（安永二年一七七三）に見えるといふ

つき出しの当座れんちよくだらけなり

や、文政六年の『柳多留』七十七篇中の

れん直な山に蛇柳ねぢり岩（四丁オ）

も、見たところの姿勢のかたぐるしき、まつすぐなことに解してよいかと思はれる。姿勢の正しさは、人間の場合、そのまま心の持ち方と相関する。

安価・廉価の意の「廉直」は、従来、漢籍の例を引くか、明治以後では、操觚者の文章に用例を求めたのみであつたことを考へ合せると、日本語の普通のものとしては、むしろ、もともと本義の場合が、文章に永く伝承せられて来たとして正しいであらう。一方通俗には雑俳川柳の世界に例を見るやうに、従来はつきりと云はれなかつた、ここに示した第三義で用ゐられることも多かつたかと考へられる。さればこそ、その時は「れんちよく」「レン直」などいふ平易な表記が普通であつたのであらう。

前に紹介した『明治冠附五百題』では
ついになひ 廉直喜代の朝齋が

といふ、正統的な表記も無いではないが。

漢語が日本語の語彙の中で大きな勢力を占めることは、既に冒頭に述べたところであるが、その一語一語の用ゐ方は、その漢語本来の内実を保つてゐる場合でも、なほ、同時に多少の逸脱があることを覚悟して解釈に臨まねばならぬかと思はれる。「廉直」はその一例に過ぎまい。